

<報 告>

中央大学保健体育研究所公開講演会

日 時：2014年11月5日（水）

講 師：荻 部 俊 二 氏
小 林 勉 研究員

テーマ：スポーツを通じた地域貢献
—— 法政クラブ（大学発総合型地域スポーツクラブ）の
取り組みについて ——

スポーツを通じた地域貢献について、大学発の総合型地域スポーツクラブを運営されている法政クラブの荻部先生をお呼びしてお話を伺いました。クラブ立ち上げの背景、ご苦勞など、多摩地域に立地する同規模大学としてのクラブ運営実際をご紹介いただいたことは、今後中央大学がスポーツと地域とをどう考えていくのかということに重要な示唆を与えてくださったのではないのでしょうか。また、後半はスポーツを通じた地域振興という観点から本学総合政策学部小林教授に、過去にさかのぼっての八王子のスポーツの実情をご紹介いただきました。これもまた、地域貢献を視野に入れたときに中央大学と地域スポーツを考えるうえで非常に重要な視点をお示しいただいたと感じます。限られた時間ではありましたが、非常に充実した講演会となりました。

保健体育研究所企画委員長：高村直成

布目保健体育研究所所長

私ども中央大学と法政大学は、車でおおよそ30分の移動時間です。そのくらいの距離感にあるといますか、非常に近い場所にあるわけですね。両大学の歴史を見てみますと、ちょうど、法政にしろ、中央にしろ、3～40年前に、都心からこの多摩地区に移転してまいりました。大学の歴史も非常に似ております。かつまた、先ほど雑談していたのですけれども、受験産業の中では、受験生を奪い合う、「MARCH」というくくりの中で、アルファベットではCが先に来っていますが、「Cが上だ」「Hが上だ」などということをお互いから言い合うような関係ですね。

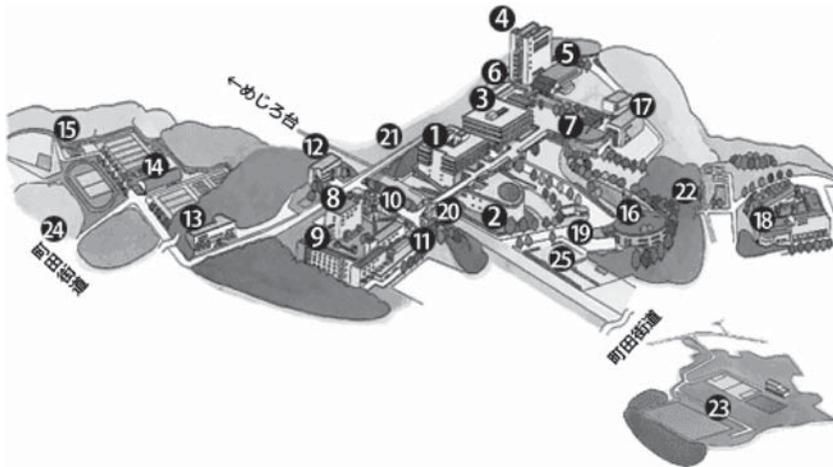
今日の講演のテーマである「スポーツを通じた地域貢献」ということですが、これにつきまして、われわれ中央大学はこれまでに、いろいろな取り組みを進めてきています。しかしながら、今はいろいろな問題を抱えていて、われわれが思うような進捗を見ていないのが現実ではないかと思います。そのような点で言いますと、「大学発総合型地域スポーツクラブ」とタイトルを打ってありますが、法政大学が母体となって進めている法政クラブという活動には、日ごろ、われわれは非常に注目しております。ですので、今日、90分程度と、限られた時間内ではありますが、ぜひ荻部先生から、できるだけたくさんの手のうちをご披露いただきまして、われわれの今後の大学の活動、取り組み、そして、研究員の研究の材料とさせていただきたいと思っております。荻部先生、よろしく願いいたします。

皆さん、こんにちは。荻部と申します。今日は、皆さんと一緒にディスカッションをしたり、また大学のいろいろな取り組み等々を皆さんにご紹介できたらと思います。

紹介がありましたが、私は、実は総合型スポーツクラブが専門ではなくて、コーチング技術や、陸上のコーチング、それから体育学が専門ですので、あまり詳しく総合型の仕組みや行政のかかわりなどに関して精通しているわけではありません。ただし、後で紹介しますが、2010年に総合型地域スポーツクラブというものを大学内に立ち上げ、そのときに、私が事務局長という立場でこのNPO法人にかかわることになったので、その立ち上げから現在まで深くかかわっております。今日はそのお話を皆さんにできたらと思っています。

法政大学では、総合型地域スポーツクラブというものの立ち上げに至ったのですが、先ほどお話があったように、中央大学さんと法政大学とは似たような境遇にあります。場所も、ここから30分ぐらいもっと奥に行ったところで、最寄りの駅は全くないですね。中央大学さんはモノレールができて、最寄りの駅ができてうらやましいなと今日は思っていたのですが、うちの大学は言い方は悪いですけども、へき地のようなところにあります。ただし、広大な敷地があります。多くの大学が郊外化したとき本大学も、八王子と町田と、それから相模原の県境といいますが、市境のところにあるのですが、そちらに移ってきたわけです。

そこでいろいろ展開してきました。法政大学の歴史的には1984年に多摩キャンパスを竣工しています。そのときは経済学部と社会学部があり、市ヶ谷キャンパスというものが今でもあるのですが、市ヶ谷から移ってきております。2000年に現代福祉学部ができて、2009年にスポーツ健康学部という、スポーツ系の学部が設置されています。私は文学部に最初はいたのですが、スポーツ健康学部を多摩キャンパスに設置するというときに、学部設置準備委員会に入って、スポーツ健康学部に移籍し、今はスポーツ健康学部にも所属しております。スポーツ健康学部は



160名の定員があります。今現在はこの4つの学部があります。キャンパス自体は、多摩キャンパスと、小金井に工学部がありまして、本部は市ヶ谷ということになります。

敷地はこのような感じです。これは、中央大学さんのホームページを見ると、これとほとんど似たようなキャンスマップがあります。多分、同じ業者さんが作っているのではないかなと思ったのですが、このような敷地になっています。体育の施設は、皆さんから見て一番左側の、15、14とありますね。そのあたりに体育の施設が集まっています。それから、本部は真ん中あたりにありまして、18番がスポーツ健康学部です。それから、下の方の23番のところ、もう1つ、城山校地というところがありまして、そこにはサッカー場や、馬の馬場などがあります。広大なキャンパスを保有しています。多分、中央大学さんも同じぐらいだと思うのですが、山の中にでんと構えているような感じです。

大学のミッション、これは全体の大学のミッションですが、このようなことが大学では掲げられております。「自由と進歩の精神をもって何事にも絶えず挑戦し、新しい伝統を創造し続ける」、それから、「自立的で人間力豊かなリーダーの育成」と、それから「最先端に行く高度な研究を行う」、そして最後に「持続可能な地球社会の構築に貢献」「教育と研究を社会に還元する」。このうちの、企業もそうですが、地域にやはり還元していくことが大学の使命、企業の使命であります。

その中に、大学創立120周年に向けたビジョンというものが1997年にあり、「開かれた法政21」というものが策定されました。その中に、グローバル化、社会との交流、生涯教育の推進という3つのビジョンが大学内で言われました。地域社会と交流を深めていきたいと思いますということが大学の一つのビジョンとして策定されました。その中で、大学ではダンススクールや、それ

から総長杯多摩カップというもので地域との交流を図ってきました。総長杯はサッカーですが、城山校地で八王子市の少年サッカーチームを集めて、多摩カップというものを開催しています。それから、教員によって作られている公開講座があります。体育スポーツ研究センターというところがありまして、正課の体育の授業と課外体育、あとは研究の冊子、紀要を作っているところですが、ここによる公開講座があります。これはテニス、バドミントン、陸上、サッカー、野球などを講座としてやっています。これが1997年策定のもので、ただ、公開講座に関しては、1980年代から、スポーツ講座を開講していました。

その後、今度は130周年を迎えるに当たって「明日の法政を創る」審議会というものが大学内の執行部、理事の中で発足されました。この中に法政のスポーツ文化の発展作業部会というものがありました。スポーツは、中央大学さんもかなり盛んだと思いますが、法政大学も積極的に行っておりまして、最近は少し調子が悪いのですが、野球も六大学では東京大学さんにしか勝てないという、3季連続5位という結果でした。箱根駅伝も出られませんでしたし、なかなか厳しい現状ですが、そのようなスポーツを盛り上げていきたいと思います。それから、地域にどのように還元していくかということを探る目的で作業部会ができました。その中で、法政のスポーツ文化の発展作業部会より「スポーツクラブの設立をしてはどうか」ということが検討されました。これが2009年の3月です。その年の7月16日に、法政クラブの設置、総合型地域スポーツクラブの設置を準備する委員会が作られました。

ですから、大学の方針として、そのような総合型地域スポーツクラブを作っていきたいということだったのです。先ほど、ダンススクールや総長杯、それから公開講座という話をしましたが、皆、ばらばらで行っていました。ダンススクールは、社会学部の教員にダンスの専門家がいたので、地域の方を集めてダンスをしていましたし、総長杯も、多摩キャンパスの事務、総務課というところが募集して集めて行っていました。公開講座は、教員が作った組織の中で、その中の体育の専門教員が募集して行っていました。資金もお金の出どころも、徴収の仕方、全部ばらばらで行っていたので、それを一つに統合してしまおうということが、総合型地域スポーツクラブを作るという目的の一つでした。

体育スポーツ研究センターが行っていた公開講座は1998年ぐらいからですね。それから、その下のアスリート倶楽部というものは陸上教室で、最初は、陸上部の監督をしている私が行っていたもので、近隣の小学校の子供たちを少し集めて陸上を教えるというような講座でした。その後、エクステンション・カレッジというものが本学にはあり、外部の方に来ていただいてやる教室授業のようなもので、例えば、詩を読む会や、江戸文学を読む会、英語教室など、外の方に公開する授業、公開授業のようなものです。当時、運動のものは一つもなかったのです。

が、その中の一つとして陸上を入れていただいたのです。

それから、町田市との連携スポーツ教室があります。法政大学は、先ほど申しましたように、町田市と八王子市と相模原市にまたがっており、住所は町田市となっていますので、町田市にお金を出していただいて、バドミントンとバレーボールの教室をしています。それから、八王子市子ども体験塾というものも行っていました。それから、ダンスフェスティバルは今もありますが、先ほどお話ししたダンス教室の方々がダンスを発表する場で、1年に1回行っていきます。それから、スポーツではないのですが、多摩コンサートというものも毎年ホールを使って、交響楽団を招待して行っています。それから、先ほどの総長杯です。このようにばらばらに行っていたものを一つに統合してしまおうということなのです。ただ、結局のところは、多摩コンサートと総長杯は今も別組織で、全部、統合できたわけではありません。

先ほどの「明日の法政を創る」審議会の中での方針は、スポーツ文化発展のための方針を挙げています。スポーツ文化の振興発展を通じた自立型人材を育成していく、次代のスポーツ文化の担い手を育成する、スポーツ文化の普及、ユニバーシティー・アイデンティティーの形成、このような形のを大学の方針として挙げていこうということを2008年から行っています。

その一つのミッションとして、VPMというものを掲げています。Vは「勝利」ですね。大学はチャンピオンスポーツとして行っていますから、ラグビー、野球など、大学の部活動、体育会の活動の強化。それから、Pは「普及」ですね。地域に貢献する。そのようなものを還元していく。研究を含め還元していく。それから、Mの「市場」は少し離れるかもしれませんが、このような三角形で、スポーツに関する明日の法政を創っていくという作業部会を立ち上げたのです。これには私は入ってなくて、大学の執行部が作成したものです。

もう一度説明しますと、ここにあるように、「勝利」とは、やはりインカレ等々ですね。野球、サッカー、いろいろありますが、これらの活躍。また、オリンピック選手などを輩出したということです。それから、「普及」とは、アスリート倶楽部は先ほどの陸上ですが、それだけではなくて、地域のスポーツに貢献しましょうということです。「市場」は、メディアに出たり、大学のイメージアップ、寄付を募ったりというようなものです。このように発展させていきたいと思いますという、大学の戦略の一つです。

実際の設立ですが、先ほどの設立準備会が2009年に発足しまして、12月に設立の総会が開かれました。その月の17日に、NPO法人化ですね、非営利の団体の承認を出して、3月には認証を受けます。そして、2010年の4月1日からNPO法人法政クラブが設立され、すぐにスポーツ教室を開催しています。専門家の方もいらっしゃると思うのですが、会社を一つ立ち上げるということなので、役員、理事、それから定款を作ったり、いろいろな手続きを踏んで法人化

しました。法人化するに当たっては、文科省の方針で、総合型地域スポーツクラブは、NPO 法人化することが好ましいということになっていたのです、それにのっとった形になりました。

総合型スポーツクラブについてですが、専門家ではないので、さらっとご紹介しておきます。1995年の文科省のスポーツクラブ育成モデルの事業によって、このようなスポーツクラブを作ることになりました。ここにあるように、「多世代」、「多種目」、「多志向」の3つを掲げ、いろいろな世代で、いろいろな種目があって、いろいろな志向に合わせた、そのような総合型のものを作りましょうという方針です。地域住民などにより、自主的、主体的に運営されるこのような総合型のものを推奨していきましょうということです。

その後、2001年からは、成人の週1回以上のスポーツ実施率を50%にすることを目的に、2010年までには全国の市町村全てに、少なくとも一つは総合型地域スポーツクラブを育成しましょうということが文部科学省によって推奨されました。ただし、これは現在でも100%に到達していません。2013年7月の時点ですが、3,237のスポーツクラブがあります。79%の設置です。100%には遠く及びません。この政策は2011年度までで、2012年からは成人の週1回以上のスポーツ実施率を3人に2人、65%程度にしましょう、さらに週3回以上のスポーツ実施率が3人に1人、30%にしましょうということを推奨するということが言われるようになりました。また、成人のスポーツ未実施者というものをゼロに近づけましょうと。それから、その中には、大学や企業と連携していきましょうということも書かれています。

次に総合型がどのような感じでふえていったかということですが、今申しましたように、総合型地域スポーツクラブは創設準備中のクラブも含めると3,400ぐらいあります。文科省のページには載っていますので、興味のある方はご覧になっていただければと思います。現在、このあたりの地域を少し調べましたら、東京は77.4%で、まだ100%に達していません。ただし、八王子は都内最多で、19クラブあります。私どもは町田市に作りまして、町田市も5クラブあります。それから、多摩市は1つあって、桜美林大学がされているようですね。それから、ここは日野になるのですか。八王子ですか。日野が5つですね。ですから、都内では八王子が一番盛んです。ただし、後でわれわれのクラブの紹介もしますが、全部が全部、多種目を行っているわけではないですし、いろいろな問題を抱えているところは多々あって、休部しているようなクラブも幾つかあります。八王子もいくつ休んでいるかはわかりませんが、そのような苦しい現状を抱えているところも幾つかあります。国が作れ作れと言って、たくさん作ったのはいいのですが、回っていないところもたくさんあるのです。私のところも、順調にしているといえは、素直にうなずけないところも少しはありますね。なかなか難しいところもあります。

ここからは、「大学におけるスポーツクラブはなぜやるのか」ということですが、われわれの大学は、大学のミッションとして地域貢献しましょうということを言っているのですが、やはり同じようなことを研究されている方がいます。大学は学術、研究、それから人材育成をしています、それを地域に返していくことが求められているのではない、地域貢献、社会貢献をしていかなければいけないということが言われています。われわれもそれに乗っているという形ですね。大学は、競技場、教室、いろいろな建物を持っていますね。ですから、それを使うということ。それから、人材もいます。教員もおりますし、また、動ける学生もいますので、そのようなものを地域に還元していくということです。

私も最初、クラブを作ったときに、説明会で保護者の方などにこう話をしました。大学というものは、うちの大学も本当に田舎にどんと作られて、偉そうにばーんと建っているのですけれども、中で何をやっているのか、地域の方には本当にわからない、非常に閉鎖的な空間なのです。都会にあればまた別だと思えるのですけれども、どんどん、開いていかなければいけない、どんどん地域の方に大学に入っただいて、もっと使っただきたいと考えているのです。現在、スポーツだけではなくて、われわれのところは、中大さんもやられているとは思いますが、図書館を地域の方に開放したりして、地域とどれだけ連携していくかということコンセプトにやっています。

それから、大学の課題が幾つか言われています。大学組織のクラブにかかわる立場、財源、それから、大学施設をどれだけ使えるか、教員・学生のかかわり方、住民のクラブ参加、それから、既存の団体や行政との連携、誰のためのクラブか。このようなことが言われています。われわれも同じような問題を抱えています。

一応、大学が作った組織ではあるのですが、NPO法人にしたために、法人が別法人になるので、結構そのあたりはもめたところもありました。学内に別の法人があって、そこに事務局がある、事務局があるということはどうなのかということです。早稲田大学さんの早稲田クラブさんは外に事務局があったりするのですが、われわれは大学内に作ってしまおうということでしたので、大学の立ち位置とわれわれの立ち位置をどうしたらいいか。また、法政クラブにかかわっている者が教員だったりするので、どのような立場でクラブにかかわっているかということを最初に考えました。

それから、財源ですが、財源も、大学からの補助をいただきながらやらないと、全く回らない現状がありまして、今も毎年900万円いただいて、それがないと会費だけではなかなか回らないという状態です。

施設も、空き授業、あいているところを使っていくということが当初の目標だったのですけ

れども、授業の関係もありますし、体育会もありますし、サークルもありますし、いろいろな団体さんが使っているところにわれわれも入っていくということになるので、そのスケジューリング等なかなか難しい壁がありました。

住民の参加ということも、これは住民に参加していただきたいということなのですが、なかなかやはり敷居が高いらしく、あまり入ってきてくださっていないというのが現状です。

それから、既存の団体との関係もあります。既存の団体を圧迫しないようにということがわれわれの一つの考え方です。これに関しては後で少し話をしていきます。

行政については、八王子市、それから町田市、相模原市の市長さんのところに挨拶に行って、「こういうのをやります」というような文書も作って提携を結んでおります。

大学の総合型クラブの型ですけれども、幾つかの型があります。チェーン型、サークル型、ユニオン型、マルチチャンネル型というものがありますね。チェーン型とは、教員が学生を指導して、学生が住民にプログラムを提供する。同志社大学にも総合型クラブがあるのですが、チアリーディング教室をやっています。チェーン型はそのような形になります。サークル型は、教員が学生にも指導し、直接のプログラムの提供も行って、学生は主にその補助をするという形で鹿屋体育大学が行っています。それから、ユニオン型は、教員と学生が結合組織、ユニオンを形成し、ともに作り上げていく。パートナーとして地域住民にプログラムを提供していくという形です。それから、マルチチャンネル型というものがあります。スポンサーシップやブランドビジネスの立場で、企業が存在が加わる。これは早稲田クラブがこのような形。いろいろな形があります。

われわれのところは、一番近いものはモデル A かなと思います。大学がもうそのクラブに入ってしまったということ、大学は外からそのクラブを支援している、もしくは、行政は外にあるのですけれども、行政とかかわりを持ちながらやっていく。ただ、真ん中ですけれども、大学と行政もつながってはいるのですが、行政とスポーツクラブもそのまま直でつながっているところももちろんあります。

なので、まず、われわれのところでのどのような特色があるかといったら、総合型地域スポーツクラブを学内で教員と学生がともに作っていくクラブを作るということです。外にある組織ではなくて、学校の中に作ってしまうということに一つ意味があるのではないかとことです。

また、各大学がどのようなことをやっているかということをもとめてみました。うちとは違うところですが、早稲田さん、慶応さん、同志社さん、東亜大学、筑波大学、鹿屋さんなど、いろいろな大学が参入していますので、新しいものではないですね。大学でこのような

ですから、その高齢者たちも楽しめるものをとということが最初の発想ですね。ただし、高齢者まで、あまり手が回ってないのが現状かもしれません。

ですので、法政クラブの設立の背景としましては、「地域の課題を解決する」ということで、われわれは町田市に法政クラブを作ったのですけれども、町田市を選んだのは、町田市に総合型が少し少なかったということもあります。われわれが作ったときにはまだ1つあったぐらいだったのです。ですから、自治体に1つ作りなさいというものがあったので、町田市がかなり乗り気で、それで一緒に作っていったということがあります。町田市は、今言ったように、長細いところで、相原地区というところにそのような、地域の方が楽しめるような施設が少ないということで、大学をぜひ使いたいという町田市の思惑も合致して、「じゃあ、協力しましょう」となったのです。

それから、大学のミッションにあるように、「開かれた大学」というものがあります。

それから、最後に「社会性を身につけた学生の育成」というものがありますが、学生を使いたいということが私たちの願いでもありましたし、学生が地域の方々と交流していくように、地域の子供たちやお年寄りや、近くに幼稚園や小学校があつたりするので、そのようなところに派遣したり、来ていただいたり、学生にいろいろやらせています。例えば何か、一つ運動会を作ってみるですとか、学生がイベントを作ったり、スポーツ健康学部にはトレーナーコースというものがあるので、何かけががあつたときの対応をするですとかしています。また、アスレチックトレーナーという資格があるので、それを学生が取るためには現場実習を何時間かやらなければいけないということがありますので、その実習にもなる。彼らの勉強にもなりますし、地域にも貢献できるしということが、法政クラブのコンセプトにはこのあたりもあります。

同じようなことですが、テーマは、地域社会のコミュニケーションの増大、それから、健康維持や体力向上など幅広い課題に取り組む。例えば、スポーツ健康学部の教員による高齢者に対する体操教室なども現在やっています。これは、本来は大学の施設を使ってほしいということだったのですが、なかなか高齢者は大学まで足を運んでいくことが難しいので、われわれから出向いて行って、近くの公民館などに集まっていたりして、座ってできる体操などをレクチャーしたりしています。それから、大学の教員・学生の経験を地域に還元していく。それから、行政・企業・教育機関などと協働、地域の諸団体と交流していく。このようなテーマがあります。

組織図ですが、以下のような組織図になっています。法政クラブの理事会というものがあります。理事会は、理事長が一応総長になっています。大学の学長と総長がうちは一緒なので、

理事長と学長が一緒になって総長という名前になっています。ですので、大学のトップがこのクラブのトップになっているという現状になっています。その理事会の中には、大学の理事が入っているのはもちろん、われわれ教員と、近くの小学校の校長先生、八王子市・町田市・相模原市の行政の方、近くの相原幼稚園の園長先生、それから、今は入っていないとは思いますが、あと議員さんが1人、元体育協会会長など、そのような感じで構成されています。

その中に、委員会は3つあります。総務委員会、指導者委員会、企画広報委員会というものがある、運営には総務委員会がかかわっていますし、何をやって、どこに広告を出して、というようなことは企画広報委員会がやっています。それから、指導者委員会は、やはり学生が指導したりすることもあるので、指導マニュアルを作成して学生に配ったり、それから、何か事故があったときの危機管理のマニュアルを作成したりしています。それから、子供たちはわれわれが考えていることと全然違う考え方を持って行動したりするので、子供たちの心理や、子供たちがどのように成長していくかということなどをまずレクチャーしてから指導に当たってもらうというようなことを、指導者委員会の方で作成したりします。

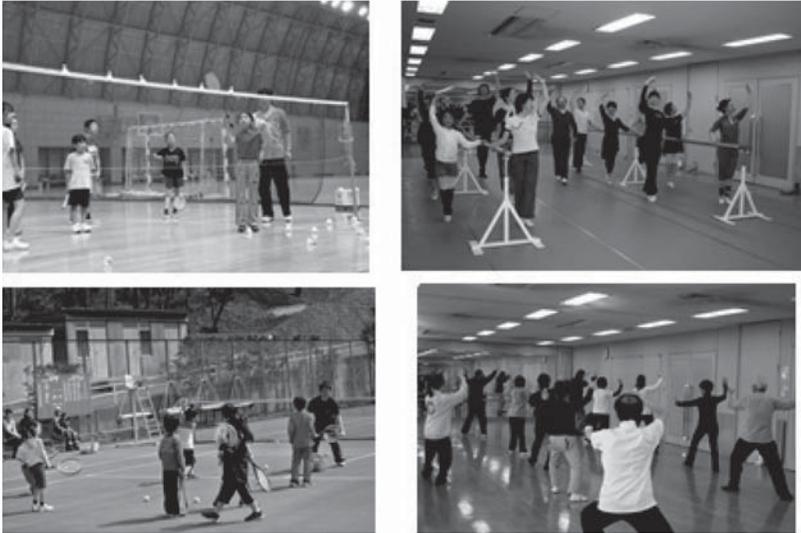
事務局を構成しているのは、クラブマネージャーというものがおりまして、資格を持った人です。クラブを設立するに当たって、クラブマネージャーはいることが望ましいということになっているため、クラブマネージャーの資格を持った方が1人おります。これが事務局体制ですね。事務局長は私ですけれども、常駐しているのはクラブマネージャーが常駐しています。あとは、地域住民の方に来ていただいて、少しお手伝いをしていただくということをやっています。

それから、その下に「アウレット」とありますが、「アウレット」とは学生の組織ですね。法政はフクロウがマスコットであるらしくて、それを「owl」と言っていて、その子供たちということで、アウレットという名前をつけて、学生の組織をアウレットという形にしています。なので、ここには、サークルの学生や、それから、ゼミでそのようなスポーツイベントにかかわるような活動をやっている学生などがそこに所属しています。その中には代表がいて、会計がいて、スポーツ健康学部のアスレチックトレーナーを目指している学生たちがトレーナー班。それから、指導する人、広報する人などで組織しています。ただし、今は少し人数が少なくなってしまう、難しいような状況になっています。

教室はこのような感じです（次頁図）。左がバドミントン、その下はテニス、右側はバレエ教室、その下は太極拳ですね。実はバレエ教室と太極拳は、今はもうやっていません。というのは、採算が取れなくなってしまって、残念ながら、今は閉めているということです。

講師ですが、テニスは、ご存じの方もいるかもしれませんが、神和住純先生という、日本で

多様な教室・講座



初めてプロテニスプレーヤーになった方です。それから、体育会のテニス部がやってくれています。バドミントンは升さんという、バドミントン部のコーチです。それから、バドミントン部には部活の方がいます。それから、ジョグ&ロードの成田先生がいます。実業団で陸上を教えた経験のある方です。あと、私が陸上競技をやっています。バスケットボール教室は島本さんという、この方は『月刊バスケットボール』という本を発刊した方ですね。このバスケット教室は、スポーツ健康学部の学生が指導補助をしています。体育会の学生ではありません。それから、サッカー塾というものもあります。これは井上先生という、スポーツ健康学部の先生です。

学生の参加は、先ほども話をしましたがけれども、アスレチックトレーナーの実習、それから、スポーツ系のゼミ、イベント系のゼミ、それからサッカーの指導者資格を取れるところがありますので、このサッカー教室の中で資格が取れるようになっていきます。それから、これは私がやっているのですが、私の授業で、青少年スポーツ実習という授業で、子供たちを指導するという実習的な授業があるので、授業の中で、ここの教室に参加させています。単位化しており、実際に教えさせるというような実習授業です。それから、先ほどのバスケットのような指導補助の学生ですね。

教室ではなく塾というような制度を取り入れています。先ほど名前で、「教室」というものと「塾」というものがあつたと思うのですが、これは確か去年からだと思ったのですが、最

初は全部「教室」という形でやっていました。教室ではなくて塾にしましょうというのは、ここにあるように、近隣の今まであったスポーツクラブを圧迫しないようにという考えから生じました。例えば少年野球なども各所にありますし、サッカー少年団もいろいろなところにあります。また、ミニバスケットボールのチームも近隣の小学校でとても盛んに活動されています。われわれが野球チームを作ってしまうと、その子どもたちを取ってしまうということにもなりかねないし、サッカー少年団を作ったら、サッカーが、われわれの方が多分、場所もありますし、もしかしたら強くなってしまいかもしれませんし、バスケットもそうですよね。なので、われわれは「じゃあ、教室ではなくて、チームを作るのではなくて、塾にしましょう」ということです。例えば、少年野球にいて、人よりうまくなりたい、ライバルよりうまくなりたい子がうちに来て専門的な指導を受けて、少し彼よりうまくなったとか、バスケットでも、うちに来て、練習して、新しいテクニックを身につけて、自分のミニバスケットボールチームに帰っていったら、新しい技術ができていて、「あの子、何か強くなったんじゃないか」と言われるための塾にしよう、ということがわれわれの一つの案でありました。なので、法政クラブで技を磨いてもらうということです。チームを作るのではなくて、チームでどこかに出て行って戦うのではなくて、「こそ練」をして帰ってくださいというような考え方です。

それから、専門の指導者のいない部活動が今は多いです。陸上などは、私は陸上が専門なのですけれども、陸上の先生がいなくて、誰も指導してくれないということが、陸上だけではなくてもいろいろなところであるので、われわれで指導できる可能性があるのなら、われわれのところに来てもらってやってもらうというような感じです。

それから、指導者派遣事業は、近隣の小学校などに要請を受けて、学生を派遣したり、われわれが行ったり、話や講演もそうですが、スポーツ教室をしたり、そのような授業もやっています。

資金ですが、基本的には会費、年会費でやっています。会費は2,000円です。2,000円で一応全ての競技に参加できる権利があります。それから、参加費があります。またさらに各種目の受講料を支払って陸上やサッカー、ラグビーなどをやるという感じですね。それから、大学からの補助。大学からの補助がなくなったら、多分つぶれると思います。上の2つだけではやっていけないですね。経営はなかなか難しいです。それから、賛助会員がいて、そこから寄付をいただいているという形になります(次頁図)。そのように寄付をいただいている団体が右のところですよ。町田市などです。八王子市と相模原市は今、寄付をいただいています。ただ、連携授業ということで、名前を入れさせていただいています。いろいろな教室をやるときに、募集するときに、市の名前があるか、ないかということが非常に大きいのです。例えば八王子

資金	連携・協力 している団体
会費（年会費）	町田市 
参加料	八王子市 
大学からの補助	相模原市 
賛助会員	ゼルビア 
	 エスフォルタ・アリーナ
	近隣小学校 
	近隣幼稚園 

市教育委員会後援などと言あるだけで違います。皆さんに先ほどパンフレットを配ったと思いますが、八王子市など書いてありますね。それがないと、小学校はほぼ置いてくれません。そのようなものを入れてもらうということが非常に大切なので入れてもらっています。なので、お金はいただいていないのですけれども市と提携を結んでおります。

ただ、余談になるかもしれませんが、そのお配りしたパンフレットも、小学校などに置いていただいて、配布していただくことは非常に大変です。まず、教育委員会が認めているかということもあるのですが、パンフレットは、学校に持っていくと、まず副校長先生が全部、仕分けしたり、中を見たりするらしいのです。それを分けることは非常に大変らしくて、ただ持っていくと絶対受け取ってくれません。きちんと封筒にクラスクラス分を全部分けて入れて、「こういうもので」ということを全部やらないと、絶対に置いてくれませんね。門前払いを何回も受けています。なので、小学校に何回も足を運んで、かなり信頼関係を築かないと、ポスターを貼ってもくれません。なので、かなりこのあたりは苦勞しています。

それから、ゼルビアさんですね。ゼルビアとは町田市のサッカーチームです。ゼルビアも総合型を作ってはいるのですが、その前はなくて、先ほどの城山というところを少し使わせてほしいということでわれわれと少し連携していました。今は関係はありません。

その下はエスフォルタという、住友不動産のやっているものですが、エスフォルタアリーナというものが、八王子市の狭間にできました。国際大会もできるような大きいアリーナ

を造ったのですが、そこも実は連携しています。もう5年か6年ぐらい前だったと思うのですが、あのような施設を作るときには、入札して、プレゼンテーションをして、「こういうものを作ります」と提案して、勝ち取ったところがあのアリーナを造ることになるのですが、エスフォルタと大成建設とミズノと法政大学が組んで八王子市にプレゼンテーションしました。あとは鹿島さんなど別の幾つか、4つぐらいですかね、のところが競合して、プレゼンテーションしてきましたが、入札して勝ち取ったのがこのエスフォルタアリーナです。10月1日にオープンしました。この間行ってきたのですけれども、立派な体育館です。そこも一つの売りとして、そのアリーナ自体が法政大学のスポーツ健康学部と連携して、法政クラブの教室をそのアリーナでやってもらう。そのようなことを、官と民と学、3つ連携でやっていく新しい形の体育館を作っていきたいということで、2票差か3票差ぐらいで勝ち取ったらしくて、それが今、このエスフォルタアリーナです。

それから、近隣の小学校や幼稚園に派遣するというようなこともやっていますので、協力してもらっているという感じです。

クラブ生の推移ですが、以下のような感じです。最初、2010年は200人ぐらいのものだったのですが、2013年は500人近くになりまして、また今年は、少し減ってしまったのですが、合わせて、中学生以下は259人、一般が167人で、420、430人ぐらいですか、これぐらいの会員数が今います。少し停滞していますね。増やさなければいけないと思っています。

今やっている教室は少ないのですが、以下のような感じです。テニスが23人ですね。バドミントンは、八王子市はかなり盛んにやられているようで、ぜひやってほしいという声があります。陸上は少し多いです。バスケット。それから、MTBとはマウンテンバイクですね。200人います。マウンテンバイクは支援組織のような感じでやっています。ですから、クラブと少し離れたところに位置します。それから、サッカーですね。サッカーは6歳以下と9歳以下です。これも、先ほどの話のように、サッカークラブに今までいる子が来てしまって取ってしまうということを避けるために、もっと前からやらせて、本当にボールを転がして追いかける、ボールと戯れるぐらいのことをやるというような教室です。塾ですね。

その他のイベントとしては、アウルカップというものがあります。これは毎年、やるものが変わります。今年はキンボールという、ニュースポーツですね、大きくて軽いボールをばーんと打って行くそのようなものをやりました。それから、午後にバスケットですね。これも、近隣の方を集めて行くものです。ただ、キンボールは15人ぐらいしか集まらなくて、なかなか厳しい現状があります。ほとんどはお手伝いに来てくれた学生で行いました。

それから、サマーキャンプも8月に行っています。これも実は、去年まで大盛況だったので

すが、今年は人数が十数名しか集まらなくて、採算が取れないので中止にしてしまいました。サマーキャンプは、去年は大学に子供たちを泊らせて、例えば、山の中にエサを仕掛けてカブトムシを獲ったり、それから、去年はたこを竹ひごで作って揚げるといって、この辺の地域で作っている方がいるので、来ていただいて、それを作って飛ばしました。それから、バスケットをやったり、あと、バーベキューをしたり、そのような、子供たちのサマーキャンプです。アメリカなどでよくしていますね。

それから、町田市の相原地区では昔、大運動会というものをやっていたらしいのですけれども、子供が少なくなって、できなくなっただけで、今、相原ふれあいフェスタという、1万人規模の、相原町のいろいろな商店や伝統芸能などがそこに一堂に会して集まるというようなお祭りがあります。その一角をもらって、われわれはタグラグビーと、それから、ボールを投げて番号のところに当てていくストラックアウトを持って行って、子供たちに遊ばせるというようなことをしています。

それから、連合運動会、これも相模原市ですけれども、もう今年で51回だったと思うのですが、相模原市の全部の小学校が参加する運動会のようなものがあります。これは、今年は麻溝のギオンスタジアムというところで行います。全部の小学校の全生徒が来ます。4日間連続でやるのですけれども、それは陸上の大会なのです。ですから、リレーをしたり、高跳びや幅跳びをしたり、子供たちがするのですが、そこにわれわれの陸上部の子たちを行かせて、例えばハイジャンプで、2mぐらいをぼーんと飛ぶところ、幅跳びで7m飛ぶところなどを見せて、われわれとしては本物を間近で子供たちに見てほしいということで、そこに派遣しています。

100m走を見せたり、ハードルを飛ばせてみたり。ハードルも106.7cmの高さがありますので、小学校の子たちから見たら、本当にとっても高いものをするすると跳び抜けていくので、本当に大声援を送ってくれます。幅跳びも、これは今、跳んでいる選手は日本選手権を優勝するぐらいのレベルの選手なので、そのようなレベルの選手と直接触れ合うことができます。

それから、それに運動しているのですが、相模原の小学校の教員ですね。小学校の先生は全て教えなければいけませんね。算数から国語、体育も教えなければいけない。ですから、体育をどのように指導していったらいいですか、と聞かれたりしますので、小学校の先生に体育を指導します。来ていただくこともありますし、われわれが行くこともあります。

それから、先ほどのエスフォルタアリーナは八王子市の狭間という駅で、行かれたことがあるかどうか分かりませんが、かなり田舎なのですが、駅をおりてすぐあります。先ほども話したように、八王子市と民、エスフォルタと大学とが連携して、いろいろなことをやっていきたいと思いますというので、10月1日にオープンしました。ただ、これも内部事情ですけれども、実

はやっと契約書ができたぐらいで、今、これから契約の印鑑を押すというところに来たぐらいですので、まだ教室はやってない、これからです。

それから、マウンテンバイク、これは別組織という話をしたのですが、自主サークルという形で行っています。これは、実は大学の敷地が山の中にあるので、その山を利用してマウンテンバイクのコースを作っています。これも、学内を自転車が走るということで、いろいろもめたのですが、一応オーケーが出まして、学内に土日だけですけれども、集まってきて、自転車で山の中を楽しむということです。東京にはあまりないようです。おとしぐらいに、相模原の相模湖ピクニックランドというところに同じようなものがあつたのですけれども、なくなってしまって、そこで楽しんでいた方がこちらに来たりしています。あとは、近くでは、このぐらいの規模なら埼玉や群馬など、あちらの方に行かなければこのようなものはないようですので、かなり喜ばれて、200人ぐらいの会員になっています。

クラブハウスがある総合型と、ない総合型があります。必ず作りなさいというわけではないのですが、クラブハウスが私たちがあります。これも学校の中にあります。このかまぼこ型のものは体育館で、下は陸上競技場です。上が事務局、下がラウンジになって、奥にキッチンがあって、料理などもできるようになっています。ただ、火を使ってはいけないという条例か何かがあって、料理は今はできないようになっています。

クラブハウス

所在地

東京都町田市相原町
 字東谷 4856-1
 法政大学多摩校地 14 号館
 (総合体育館)
 面積 152.44 平方メートル



これも、作った理由は、われわれのクラブはヨーロッパ型のクラブチームを作りたいというコンセプトにあります。ヨーロッパでは、たとえばドイツなどに行くと、そのようなクラブに行って汗を流して、クラブハウスへ行ってお酒をばっと飲んで「じゃあ帰る」というようなクラブがたくさんあるのです。われわれもそれを目指しましょうということで、クラブハウスを作りました。運動して、ここに来て、お酒でも飲んで、シャワーを浴びて、楽しんで帰るというようなスタイルを目指しました。ただ、現実には、大学は非常にへき地にあるので、皆、車で来るので、結局、酒を飲めないという現状になって、皆、お菓子を食べて帰るぐらいの感じでした。ただ、とてもきれいなクラブハウスを作っていただきました。

今年は400万ぐらいの収益があります。最初は全然お金が入らなかったのですが、2012年ぐらいから少しずつ入るようになって、今は大体400万ぐらいでしょうか。それでも、全然回りません。事務局にもお金を払わなければいけないし、講師にも講師料という形で支払っているし、学生にも一応、少し指導料を与えたりしているので、この他に大学から幾らかもらって回しているのが現状です。事務局は今3名います。本当は4名分のお金があるのですが、1名はいなくて、そのうちの1名は学生です。もう1人は、去年卒業した卒業生が今おりますが、その卒業生は今年、教員採用に受かったので、辞めていきます。その子が入った経緯も、教員採用に受からなかったので、「1年間勉強させてください」ということで、そこに入ったという感じでした。来年の子も多分、教員採用を今年落ちて、「1年間勉強して、受かったら出ていきなさい」というような感じになります。なので、クラブマネージャーと、会計をやっている方は常駐なのですが、あとの2人は学生と、そのような卒業生のような者を入れさせているという感じでした。

広報も、この辺の大体の地域でどの人たちが来ているということを調べ、「じゃあ、どこから来ているから、ここに広告を、パンフレットをやりましょう」というようなことをしています。大体、町田です。町田に沿ったようなところから来ています。

ただ、新聞広告をしてみたのですが、何万部と配り、40万ぐらいかかるのですが、応募があったのは2件ぐらいでした。新聞広告はもう二度とやりません。われわれもそうなのですが、折り込み広告は、あってもあまり読みませんよね。だから、多分、全然効果がなかったのだと思います。だから、多分、もうやりません。一番いいものは口コミですね。来ている人たちが呼んでくる。「呼んできてくれたらちょっと割引しますよ」というようなことが一番増えますね。このような感じでした。

それから、アンケート調査を実施しています。会員満足度を調べて、表のような形にして、指導者にも「こうこうこういうことを言われてますから、ちょっと直してください」「こういう

ふうにしていきましょう」というようなことを定期的にやるようにして、会員サービスを向上させるように努めています。結構クレームはあります。「また同じことをやっている」などと、よく言われます。

それから、課題ですけれども、まず、会員の確保はなかなかやはり難しいです。小学校でやっていると、中学生になると辞めていってしまいますし、また新しい1年生が入ってくれなければいけないし、中学生もそうですね。高校になったら、部活があるからということで辞めていく人もいますし、会員の確保はなかなか難しいです。

それから、高齢者です。高齢者も需要はかなりあるのですけれども、高齢者は言いつらいのですけれども、絶対赤字になります。それは非常に私たちは頭が痛いところなのですが、高齢者を相手にすることは、必要だけでも、やるのは難しいのが現状です。やればやるほど赤字になっていきます。単発でしてみたりするのですけれども、大学にも、バスを出さないと来てくれないということがあるので、なかなか厳しいです。

それから、われわれのところは電車でなかなか行けないところですので、駐車場が確保できない。それから、事務員がかなり安い手当でやっているの、この手当をもう少し上げたい。それから、地域ボランティアが少ないのです。地域の住民の方がもっと参加して、経営などにかかわってほしいのですけれども、まだそこまで行けていないかなということがあります。

それから、これは総合型地域スポーツクラブとは全然関係ないのですけれども、法政大学は2011年4月にスポーツ憲章というものを、立ち上げました。スポーツ憲章前文というものがあります。興味のある方はホームページに載っていますので、ご覧いただければと思います。

大学の紹介に終始しましたけれども、現状は、うまく回っているところもありますが、厳しいところも非常にあって、経営は苦しい現状があります。また、少し時間が延びてしまいましたが、後でご質問等々があったら、コメントできればと思いますので、またお話しできればと思います。以上になります。ありがとうございました。

「スポーツを通じた地域振興」

総合政策学部の小林でございます。苅部先生、貴重なお話をありがとうございました。僕の方は総合型がキーワードということですが、少し視点を変えさせていただこうかなということで、30分弱ほど少し話題提供させていただきます。その後、皆さんでご議論していただければと思っております。

皆さん、その場で立っていただいてよろしいですか。座ったままでも結構です。もうお疲れ

だと思いますので、まず肩を回してみましよう。では、人差し指を立てていただいて、これを時計回りにずっと、目の前、自分の顔の周りで回してみてください。時計回りに、これをゆっくり上の方に上げていって、これは今度、何回りに見えますか。時計回りと反対に回っているようにみえると思います。ありがとうございます。ここで盛り上がっていただけないと厳しいのですが(笑)。今日お話ししたいことは、実はこうしたことなのです。同じ総合型という現象をみてきて、けれども、少し見方を変えると何か違うように見えてくるということがよくあります。それが今日の論旨です。どうぞご着席ください。御協力いただき、どうもありがとうございました。総合型をいろいろと見ていて、取り組みとしては同じことをやっているのだけれども、「見方を変えるといろいろなことが見える」ということが、私の本日の趣旨となります。

スポーツを勉強されている学生さんなどはよくご存じだと思うのですが、国が総合型育成支援をしてきました。1990年代後半から始まったのですが、2000年代により具体的に、そして本格的に、文科省を中心に事業が始まりました。これは昨日調べたのですが、論文検索サイトCiNiiで、「総合型地域スポーツクラブ」というキーワードを入れるとじつに500件近くの文献が出てきます。このキーワードだけで、とんでもない数の文献が出てきます。このようなものに目を通してレビューしていきますと、いろいろなパターンがありまして、「いつでも、どこでも、誰とでも」へ向けた運営のノウハウについて言っているもの。もしくは、NPO法人化を指南するような内容の文献。総合型をつくるに当たって、運営するに当たってのメリット・デメリットも含め、とにかくいろいろな研究がなされてきています。特徴としては、総合型をめぐる事象を「現在」という断面図で切って、そのスポーツの実践の模様をいろいろと分析する、考察するというパターンが圧倒的に多いということです。もしくは、そこをベースに今後どのような課題に向かっていくべきかという、今後に向けて「未来形」で語られる形の論考も多いです。

10年以上前、私の前任校は長野にありまして、長野県も実は当時、全国に先駆けて総合型に取り組んだ先進県でありました。そんな中で、県や各地の教育委員会から依頼を受けて、総合型地域スポーツクラブのコーディネーターをずっとしておりまして、毎週のように長野県各地を飛び回っていました。こちらに来ましても、八王子の市役所からいろいろなご相談を受ける形でやり取りをしてきて、僕自身もゼミ生などを連れて、よくフィールドに出るのですが、そのような活動をする者の実感からすると、何か、現在形で語られる、もしくは未来形で語られる総合型の論調に対して、非常に首を傾げざるをえないと思うところがあるのです。

結論から言いますと、現在のスポーツ活動、もしくは今後実践されるスポーツ活動というの

は、そのときから始まったわけではなくて、そこには、そこに至る歴史があり、そういったものが蓄積されて現在に続いているという、何かそのような「時間軸」で見ていく必要もあるのではないかと、私は考えています。多くの方が、これからの総合型のあり方などと言って、いろいろなスポーツの活動の形態のことをおっしゃられて、それはもちろんすごく well-intended で、よく書かれている研究も多く、力作ぞろいなのですが、僕のように、フィールドにずっと出ている者からすると、何か物足りないといえますか、実態と違うなと感じることが数多くあります。今日皆さんにご紹介したいことは、実はこの「時間軸」というものを、地域スポーツというフィールドに挿入してみると、どのようなことが見えてくるのかということから、先ほど冒頭で皆さんにやっていただいたように（指を目の前で回すと上から見るのと下から見るのとでは違って見える）、同じ総合型ですけれども少し違った側面が見えてくるというような、そんな話をさせていただきたいと思います。

中央大学のある八王子市ですが、戦後に焦点を当てますと、八王子空襲がありました。壊滅状態になった状況を一転してスポーツ実践へ向かう、いろいろな人の姿が見て取れて、そこには必ずと言っていいほど、敬意を払われるリーダーシップを見て取れるということです。元々、そのような人たちは近隣関係あるいは種目ごとの連盟内での信頼関係の中で選ばれてきたリーダーたちで、彼らは各方面から支援を取りつけるために、人よりも多く心血を注いだり、市民スポーツの拡大に大きく貢献したり、そのような人たちが体育会種目ごとに結成したりと様々な活動を展開していました。そのような人々は行政によって選ばれるということではなく、そのようなことで権威づけされるようなリーダーシップでも決してなくて、コミュニティ、もしくはそれぞれの連盟内で経験的に涵養されていた、ある種リーダーシップを携えた、労を人一倍多く執る個人、そのような存在が、実は八王子市の地域スポーツの時間軸を遡っていくと、浮かび上がってきます。

例えば、今日皆さんにお配りしている資料1というところをご覧ください（資料文末）。これは八王子市体育協会が1996年にまとめた、八王子市体育協会の創設期を知っている方々たちに集まっただいて座談会を開いたときの座談録で、そのときの歴代会長への述懐部分を抜粋したものがあつたのですが、「東京都議会自民党幹事長までやった人だから、政治手腕があつたので」云々と、「体育協会を一生懸命発展させようというような努力をしていたことは私は認めたいですね」などというような方もいらっしゃったり、「T 会長さんの場合は非常に切れる方でね、先も見えるし、気性も激しいかもしれませんが、確かに、見通しということにおいては、今までの会長にはない鋭いところがある」と。実はこうして語り継がれる歴代会長の功績が、いろいろなところから見て取れます。八王子市のスポーツ振興という共通の目的を達成するた

めに、地域固有の暮らしの中で生み出されてきたリーダーたち、そのような人たちが牽引役となって、自発的な組織が形成されていきました。そのような人たちに、後の後輩たちが敬意を持って歴代会長の功績を語り継ぐなどという構造がよく見て取れます。そのような組織は、住民自らの力で担い手組織を運営していくことになります。

スポーツを通じてつながるネットワークの中から、このような方々は間歇的に出現するわけですが、そのようなキーパーソンとなる人たちの重要性と功績については、今、八王子市体育協会の事例で言いましたが、実は種目ごとの連盟を調べていっても、同じようなことが見て取れます。例えば野球連盟の50年史に寄せられた文章ですが、資料2をごらんください。「思い出の人々」というところで、お手元の資料の②をごらんいただきたいのですが、皆さん、それぞれご一読いただければと思います。下線を引いておきましたが、「名物審判のナガカタ、カスヤ、トウジ、イマフク、モモタロウ、マツモトタケオ氏の各氏を筆頭に」云々と。当事者の方々にとっては、すごいメンバーの名前が出てくるわけです。「野球のみならず、スポーツ全般にわたりその振興に尽くされた功績は後世に語り継がれ、わが野球連盟の誇りと言っても過言ではありません」と。最後の方の「野球をこよなく愛し、自宅にまで多くの後輩を呼び育てられ、会長として創立40周年を祝ったのを最後に、通算50年に及ぶ野球人生を閉じられましたが、私たちの脳裏には、あの眼鏡越しに連盟や審判の道を説いた姿が今も浮かびます」、このような回顧録が載っているわけです。

八王子市体育協会をはじめ、各連盟を支えたキーパーソンの方々への活動は、そのような意味では、八王子市のスポーツ活動を市全体に浸透させていく上で非常に大きな役割を担っていたことが、このような資料の一端からも垣間見ることができます。地域の中で繰り返られるスポーツ活動は、大抵の場合、このような有力者層の人的ネットワークに不可欠に連結してしまっていて、普通の人々に必ずしもなじみがなくても、精力的にスポーツを活動する人にとっては、活動を下支えする重要な交渉窓口となってくれる。地域を歩いていると、ほとんどと言って良いほど、このような人にぶつかることになります。「あの人を敵に回したらだめだよ。あのおばちゃんとは仲よくなっていた方がいいよ」と。まさにその通りなのです。

例えば、以前、ヒアリングをしようと、某スポーツ協会にアポなしで飛び込んでいったことがあります。そうしたら無下に断られて、「総合型のことについてお話をお聞かせください」と言いましたら、その組織は総合型に対して事業計画を掲げていたのですが、実質上は何もやっていなかったためなのか、どこそこの大学から来て、恐らくそこをほじくられることが嫌だったのだと僕は推測しています。邪推かもしれませんが、多分そんなことだろうと思います。僕は、計画されていたことが実施されていないことを指摘するような気はなくて、ただ単にお話

を聞きたかったなのだけですが、ものすごい剣幕で追い返された経験があります。「会長は今いませんから」ということで、名刺を置いて、「いつでもいいので、お時間のあるときにお話だけお聞かせくださいませませんか」とお願いし、「では、それだけは伝えておきます」と先方から言われたのですが、その後、相手から一向に連絡は来ませんでした。その足で、八王子市役所のスポーツ振興課へ行って、「いや、すごい剣幕で追い返されてしまいました。」と話したら、振興課の人が集まってきてくださって、「あの方は敵にするとまずいんですよ。ただし、反対にあの人が味方についてくれたら、もう市民大会なんかはかなり円滑に運営することができるんですよ。受付にいていただくと、もうほとんどの方が顔見知りです。スムーズに運営をやってくれますから」と。これは極端な例ですけれどもね。しかしながら、「ああ、そうか。じゃあ、アプローチ間違っちゃったかな」と反省して、その後、何とかアプローチしようと思ったりもしてるんですけど。そのような人たちは、普通に見ているだけではわからないのですが、地域で展開されるスポーツの世界に一步踏み込むと、そのようなキーパーソンの人がほぼ必ずいるということです。人脈、コネという、あらゆる関係が地域でのスポーツ場面における、インフォーマルな、社会的・経済的やり取りを下支えしている。そのような状況が見て取れるわけです。

種目ごとの連盟には必ずそのような人がいて、そのような人たちが連盟の歴史を作ってきているのですが、組織化が初期の段階を超えて軌道に乗り出すと、今度は連盟がそれぞれにいろいろなことを独自にやり始めます、八王子の場合。これは他の地域でもおおよそ共通すると思います。例えば卓球連盟、バドミントン、野球連盟、いろいろ抜き書きしましたが、この配布資料の中央部分をご覧くださいと、バドミントン連盟は昭和46年に発足ですが、その下の鍵括弧部分には、「金500円なり」の協会設立準備金を出し合って、有志は東奔西走し、八王子市体育協会、三多摩・東京都・日本バドミントン協会への加盟、スポーツ少年団分団の結成、指導員育成、体力づくり推進運動の推進・協力、指導員・審判員の養成云々と、かなり能動的に活動を始める姿が見て取れます。そして、そうした活動が今のバドミントン連盟の礎を築いているのです。創設に向けて準備金を出し合った連盟もあれば、地区・市・郡レベルで連合組織へ参加していく連盟もある。もしくは、婦人部の発足をさせる連盟もあれば、独自に養成講座、大会の企画・開催をするような連盟も立ち上げられたりもする。これが大体、昭和30年代、40年代に多く見られる。このような各固有の連盟の小史、歴史が示すことは、実は八王子市のスポーツ振興を構成する組織や事業は、種目を軸に過去から現在への非常に高い持続性を保ちながら進展してきているという事実です。

このような主体形成は、実は、振興事業などのような、政府が仕掛ける短期的なプロジェクトでは決して実現可能なものではありません。そのことは、GHQが民主化政策を取って、戦後

間もないころ、学校剣道が禁止されたのですが、そのとき、八王子の剣道連盟がどのような対応をしたのかということを見ると、さらに明白になります。皆さんにお配りした資料3をごらんください。それには「当時、高井戸にあった岡田守弘先生の道場では、警視庁最高師範の道場ということで、GHQから稽古が許されているという情報と、フィリピンでマッカーサー元帥をゲリラから救ったお礼にと、目黒区のアベマサトさんには、その神社の境内での剣道大会を行うことが許されていたという情報を得た。当時、剣道ができたのはこの2箇所だけであったとのことであった。以上のような情報は得られたものの、いまだ禁止令は解除されておらず、正式に剣道の稽古ができる状況ではなかった。昭和26年3月、戦災で焼け野原の、いまだ復興されていない、市内のスポーツ店の蔵の2階に数名の剣道愛好者が集まり、わずかな情報を頼りに、桑都剣道連盟を結成した」。会長に誰々とあり、資料の最後の部分ですが、「二十数名の陣容によって活動を開始した。稽古は八王子警察署の道場を借りて行うこととなった。岡田道場等の情報は得ながらも、いまだ剣道に対する制限措置は解除されたわけではなく、いつGHQから呼び出しを受けるかもしれないという状況で、もし呼び出しがあったときは誰が出頭するかと覚悟を決め、悲壮な思いで稽古をしていたものであった」などという記述があります。

このようなことから見て取れることは、剣道の禁止令解除が遅々として進まない状況下で、GHQによる監視の間隙をすり抜けながら、市内のスポーツ店や地元の警察署という身近な、等身大の相互扶助活動を通して、自らできることを適宜適当な形で実行に移し、稽古を続けていこうとする剣道愛好者の皆さんの能動的な働きかけです。この場合はGHQの民主化政策ですけども、その影響を受けつつも、自分が愛好する種目内で交差するネットワークと集団によって、長い時間をかけて等身大の変化を起こしてきた、まさに八王子市民が編み出した、地域に暮らす、当事者としてのスポーツ実践の姿が、このような一節からも見て取れるわけです。

ただし、ここで注意しなければいけないことは、各連盟においては、八王子市全体を包括するスポーツ振興の視点を持っていたわけではないということです。むしろ、個々の種目レベルでの発展を望む形で、自分たちが愛好する種目の底辺拡大と技術向上を目指した活動が絶え間なく実践されてきたという側面です。そしてそのような回路網は「よそ者」が来て一挙に学べるものではなくて、時間をかけて、周囲の関係者の身の処し方を見たり、活動をともにする中で習得される、いわゆる生活の一部の中に埋め込まれたようなものであると思います。「スポーツ関連の組織・ネットワークの特徴とは何か？」などという質問が来たら、少なくとも私は、そうしたことを回答として引き出すかと思えます。「スポーツ、いいね。振興、全体としてすればいいね」、こうした見解は多分、理念的にはどなたも異論を唱えることはないのですが、現実

的には、「スポーツ」という総体に足場を置くのではなくて、皆さん、住民が足場を置いているものは、それぞれの「種目」だということです。

もう一つ、体育協会と連盟の話をしましたので、八王子市の地域スポーツを語る上で欠かすことのないアクターとして八王子市民体力づくり推進協議会、通称「体力づくり」と呼ばれる組織が市内23地区に張りめぐらされていることについてお話したいと思います。

この組織は1960年代後半に立案されて、全国に先駆けて、今の総合型に通じるような活動を既に始めていた組織です。1974年には文部大臣賞も受賞するなど、八王子市の地域スポーツを語る上では欠かすことのできない存在です。ところで、先ほど苅部先生にお話しいただきました、総合型を全国に広めようという動きが2000年代以降、政策の中で出てきます。少なくとも自治体レベル、中学校区程度に総合型を作ろうという政策課題が文科省から示されることになります。各政府は、基礎自治体も含めて、その政策課題の達成に動き始めなければいけないというような潮流になったとき、八王子市の場合は、その矛先をこの体力づくり連盟に向けたわけです。既に同じような、似たような活動を展開していたのですが、人員構成という面からみると、「体力づくり」の構成メンバーは、大半が成人でありました。それを多種目・多世代に拡大していこうとしたのです。加えて、原則無料であった参加者の負担を有料・会費制にして、市内に既に幅広く活動を展開していたこの「体力づくり」の活動を総合型として転換していこうというスポーツ振興政策を取っていったわけです。

実際に、現在20近くの総合型が八王子市内にあることになっています。総合型クラブでは、会費を徴収し、自主財源・独立運営ということを一つの理念にしているのですが、実際には、会費を取って運営している総合型のクラブはあまり多くありません。では財源がどうなっているかという点、「体力づくり」の場合、一つの収入の柱が次のような形となります。これは市内のある地区の総合型クラブの事例ですが、その地域は夏になると盆踊り祭りが開催されます。その屋台骨の組み立てから模擬店の出店に至るまで、そのようなところにクラブメンバーを派遣して、いろいろな形で地域の中の関係機関に便宜供与を行います。人員を動員し、盆踊りのような年中行事を下支えするというわけです。その中で、地区の盆踊りですから、いろいろな有力者から寄付金が寄せられます。この一部がクラブの財源として管理されたりするのです。彼らは、総合型というものは会費を徴収して運営するということは勿論十分わかっています。ただし、それを本当に字義どおりにやろうとしたらメンバーが来なくなることも同時によく知っています。先ほどのお話にありましたけれども、高齢者の方はお金を払わないのですね。まさにそのとおりで、それを、国が言う運営方法でやった瞬間、そんなやり方で参加する人なんていなくなるということを重々承知しているので、彼らは別のやり方で自分たちの資金を調達

するという生活戦略を張りめぐらせるということです。また、このように地域の祭りの中に出店、模擬店を出すわけですね。その売り上げで資金を調達し、それを運営経費にしていくというやり方です。

「いつでも、どこでも、誰とでも」というような形が総合型の理念をあらわす一つのキャッチフレーズがありますが、そのようなことをやっているクラブはほとんどなく、故意にスポーツの場を制限することもあるし、隣接する組織と一緒にならない場合もあります。行政側は「総合型ですから、既存のクラブ同士が連携し合って、総合型としてやってください」というような指導を試みたりしますが、「隣の地区とやったところで、余計な負担ばかりふえて、自分たちに何のメリットもない」などということも、地域で活動している人たちにとっては、よく認識されていて、そのようなことにズカズカと踏み込んだりはしません。

例えば、これはインタビューの内容を文字起こししたのですが、ある総合型のクラブマネージャーの言質です。「うちを重点で参加者を集めるなら、サッカーをやってもいいよ」と。「それで集めて外部から来るならいいけど、初めからよその地区から来て、会場だけ借りたいから総合型に登録したいというのはだめだ。」ということでした。「施設を使ったら終わり、関係ありません」ではなくて、使う以上はうちの団体の傘下さんなんだから、うちが行事をするときには必ず誰か出してくれ、協力しなさいよ。」というようなことを言うようにしているのだそうです。「そんなことだと、クレームは来ないんですか」などと聞いたりしても、「クレームなんか来ないね。うちは地域を中心にやってます、と施設利用の問い合わせには回答している」のだそうです。それと地区の運動会ですね、「何か総会がある」—地区の総会ですね、町会—「そういうときも、ただ会場を使っているのではなくて、その一員として参加してもらわなければ困る、と言うようにしている」のだそうです。

このような言質から浮かび上がってくることの一つは、八王子市は町会の論理が強いところはまだまだたくさんあるのですが、そうした論理を強調するこのような発言は、活動場所の問い合わせに対する具体的対応には、「いつでも、どこでも、誰とでも」の理念を追求し、新規参加者をいわずらに増やそうとする、いわゆる国の総合型をなぞった論理、そのようなことよりも、実は、これまで自分たちが経験してきた団体同士の場所の取り合いという軋轢を「地域行事に参加してよ」という形で、事前に回避するというようなやり方です。その地区、その地区に、いろいろな調整の仕方が存在するというわけです。故に、「いつでも、どこでも、誰とでも」などということには絶対になりません。しかしながら、そうしたクラブも総合型としてカウントされていますし、彼らは総合型としての活動も実際に行っている、補助も受けているということです。

彼らは、実は非常に長いスパンといいますか、多岐にわたって彼らのパースペクティブは延びていまして、特にこのようなクラブマネージャーの方を含め、地域で頑張っている方々は、町会単位で、中高年の方が多いのですけれども、町会単位では今後は難しいと予想される防災訓練、防災対策、治安活動なども視野に入れた活動を展開しようとするFさん（クラブマネージャー）の組織にとって、地域の運動会や納涼大会の参加や協力は、その第一歩として必要なのだという認識です。つまり、町会に入ってくる人もどんどんいなくなり、若返りが図られなくて高齢化してくる。それに伴って防災訓練、地区の防犯活動、治安活動などが手薄になってくる。そこにどうしても若い世代を引き入れたい。しかしながら、それを直接的に言ったところで、若者は来てくれない。そのようなときの一つの「hook（留め金）」として総合型のようなのものを利用しているというところを、しっかり彼らは見据えているわけです。

「体力づくり」を母体とする組織は、学校や地域社会に対して便益を供与することを通じて、施設をめぐるステークホルダーの間に一定の互酬性を成立させています。どのようなことかという、校庭を管理する権限を「私たちが預かります」とお願いされるのです。学校開放の調整というのは副校長先生にとって大変な仕事です。施設管理もあるし、それから、学校の運動会とぶつからないような日程の調整もしなければなりません。それを総合型の組織、事務局が担ってくれる。これはもう、学校の教員側としてみればありがたいこととなります。そして同時に、そのことはスポーツする側の組織にとっても、自分たちの活動場所を非常に有意義な形で担保できるという便益がある。ただし、それだけじゃなくて、学校で、地域の草むしり活動があったりします、他にもいろいろな行事があります、その際、地域住民の助けが必要となるときには、そういった場面にも出ていって便宜を供与したりするのです。いわゆる「持ちつ持たれつの関係」を、彼らは地区の中で、歴史の中で育んできているのです。つまり、使い手の立場でばかりではなくて、地区の行事を手伝ったりするなど、地域と学校の連携において重要な担い手として活動している姿が見て取れるというわけです。

実は、地域のスポーツ、コミュニティスポーツのようなところに一歩、二歩、三歩と入っていきますと、地域の中にはこのような、一見すると目に見えない力が縦横無尽に走っているということを、僕自身のこれまでの経験から痛切に感じたりします。どの活動、どのような地域であっても、圧倒的多数の場合は、スポーツ、レクリエーション組織は何らかのこのような歴史的世界に包摂されながら、一定の密度を持って、その外側と区分されるようなネットワークによって構成されています。これは非常に特徴的です。つまり、市民の間でのスポーツ振興の道筋というものは突出した組織、もしくは突出した有力者によって、画一的、計画的に描き出されてきたものでは決してないということです。つまり、トップダウンで、総合型のよう

いろいろな十全な準備，プランのもとでプロジェクトを動かすというような形ではなくて，実は，幾つものアクター，多くの方々が長い歴史の中で相互に絡み合った，複数の東で同時多発的にスポーツ実践が展開されてきたということです。そのような中で地域のスポーツなどというものが育まれてきているということが多分，一番現実に近いところではないかと，私は捉えています。

そのようなスポーツ活動の歴史的还是しくは構造的な背景を無視して，実は文科省は，総合型地域スポーツクラブという理念のもとに，多様なアクターをまとめようとしたのです，無理やり。それに対してインセンティブとして補助金をつけたりして，今や3,000を超える総合型が全国にあると報告されています。ご紹介がありましたように，八王子にも20近い総合型がある。僕がかつて住んでいた地域にも，総合型地域スポーツクラブがあるというようなかたちになっています。不思議に思って，地域の子供友達を通じて，その総合型を「知ってる？」と尋ねてみても，誰も聞いたことがないという答えが返ってきます。では，何が起きているか。実際には，元々ある中高年の「何とかクラブ」が「総合型」と看板を変えているなどという事態が頻繁に起こっていたりするわけです。総合型の理念を具現化するような組織が本当の意味で全国に3,000もあつたら，日本のスポーツシーンというものは大きく変わってきてても良いはずなのですが，そんな実感を持つことはほとんどありません。もちろん変わってきている地区もありますし，そのような側面も見取れる局面もありますが，3,000という数字と，われわれが目にするこれまで10年，20年のスポーツシーンの変容の程度には，残念ながら関係性を見出すのは難しいような状況です。

八王子市の場合は，無理やり東ねようとされたが故に，コンフリクトが生じてきていたりします。例えば，ある地区では，今でも，「総合型」などという言葉が発しようものなら，地域のスポーツクラブ，組織の方々から「つるし上げ」に遭うと揶揄するエピソードを耳にしたりします。これは僕の言葉ではなくて，当時の総合型を推進していた担当部局の方々のお話ですが，そういった過激な言葉からも窺えるように，総合型地域スポーツクラブの育成の過程で，かなりの禍根が地域の中に残されているというのが一つの実態です。

こうした八王子市のケースから明らかになることですが，まずスポーツに引き寄せられる人々とは，「スポーツ」という複合的で抽象的な活動ではなく，先ほども申し上げましたが，たとえ種目の選択に可変性があつたとしても，あくまで自分の欲求に見合った具象的な特定の種目に参加しているということです。当たり前のことですが，僕はサッカーが好きなのですが，バスケットボールのために自分の貴重な時間を割いて何かやってくださいと言われても，おそらくやらないと思います。多分，そのような方は少なくないのではないのでしょうか。スポーツ

は好き。でも、自分はバスケットやっている。では、卓球クラブの方のために何かやれと言われても困ってしまう。多分、部分的にはやるかもしれませんが、それが恒常的にやり続けられるかという点、絶対にそうではなくて、恐らくご自身が肩入れする種目に対して、あくまで人は献身的になれる。そんな感じだと思います。むしろ、八王子の歴史はそのことを如実にあらわしているということです。活動の担い手たちは、総合型地域スポーツクラブのような、スポーツやレクリエーションという複合的な総体のために活動しているわけではなくて、当然のことですが、具体的な種目に引き寄せられる。いわゆる分立関心ですね。一つずつ違った種目への関心で成り立っていることが、実は、当たり前のことですけれども、それが人々のスポーツ実践の実態なのだということです。

総合型のような試みを展開するなら、これは、僕の10年以上にわたる研究の結果から、一つわかってきたことですが、八王子の場合で言いますと、そのような八王子市の歴史に刻印される市民のスポーツ実践、そこには必ずと言っていいほど、各団体固有の沿革が投影されている「インスティテューショナル・メモリー」という、その制度なり、その組織が持っている記憶があるのです。そのようなものの視点をやはり忘れてはいけません。そのようなものを忘れた瞬間、これはかなりのコンフリクトが生じてくるというわけです。

先ほど「体力づくり」の話をしました。「体力づくり」が、あるときを境に「総合型になってくれ」と水路づけられ始めました。そうすると、数十年にわたって、自分たちは地域で活動してきたのに、それを突然否定される意味がわからない。1974年には総理大臣賞ももらって、あれほど自分たちは優良組織だとして表彰されたものを、あるときを境に、それを発展的に解消し、総合型になってくれと言われてしまう。自分たちの歴史が否定されたと感じるわけですね。故に、行政に対して牙をむき始める。もしくは、そのような外圧に対して、ものすごく反発するようになる。その結果、地域にはいろいろなコンフリクトが生じていったという側面を見とることができます。

総合型地域スポーツクラブに取り組む際、もう一つ留意すべき事項として、組織間の関係というものがあります。この組織間の「調整コスト」を考慮する必要があるのではないかと思います。多分、総合型地域スポーツクラブに直接的に関わっている苅部先生が一番ご苦労されているのではないかと思います。その調整作業には相当量のコストがかかります。そのコストを、では、誰が担うのかという問題です。おそらく法政クラブさんの場合は、苅部先生を筆頭に、そのような人材に恵まれたからこそ、総合型地域スポーツクラブが運営できていると私は推測しますが、おそらく、通常の現実社会においては、そのようなコストを担えるべき人材を見出すことにはかなりの困難を伴うのではと思います。複数の組織がある場合、それらの

間の調整をうまく行わなければ、単独の組織で、もしかしたら地域貢献に対してプラスとプラスになるようなことがあったとしても、それを足したら単純に2になるわけではなくて、それを総合型という形でリンクしようとした途端、コンフリクトが起きますので、ゼロ以下になる可能性がある。ゼロではなくてマイナスです。その失敗の例は、先ほど言ったように、この近くにもあるわけです。クラブ設立の過程で受けたダメージは、実は、その場限りで終わればいいのですが、そのコンフリクトが生じてもう5年以上たっていますけれども、いまだに、「総合型と、その地域で言っちゃいけませんよ、先生」などと、冗談交じりに言われるようなことがあるのです。つまり将来にわたって負の影響を与えるというような可能性があるのです。

ということで、時間も少なくなってきていますので、最後に、1点だけ最後にお話しします。では、総合型地域スポーツクラブのような形のもので描ける「大学発」ならではの活動内容として、どのようなものが考えられるのか。これは笹川スポーツ財団の調査ですが、「子供の運動能力の向上は、どんな考えですか」と言うと、「いろいろな運動遊びを経験させるのがいい」という回答が圧倒的に多いわけです。その質問をした同じ指導者に、「じゃあ、子供を指導する際、一つの種目に絞って行うのに適していると思っている時期はいつですか」と言いますと、大体3割近くまでが「小学校高学年まで」を言うわけですね。理念的には、いろいろな運動遊びを子供にさせることがいいと言っているのに、実際、自分が指導しようとすると、「自分の種目に専門特化してほしい」などと回答する人が3割もいるのです。このような理想と現実のギャップが実はグラスルーツレベルで起こっています。

あと、子供の試合参加について、「できる限り子供に試合の機会を与えた方がいいと思う人」は「いや、上手な子供に優先的にその機会を与えればいい」と回答する人より圧倒的多数になります。すなわち、「いろいろな子供にできるだけ機会を与える」ということが重視されているというわけです。ところが、強いチームの子どもたちの間では、Aチーム、Bチーム、「おまえ、Bだから雑魚だよな。俺はAだけ」というようなことが普通に、保護者も含めたかたちで会話されたりしています。そのようなことが現実として起こっています。しかしながら、質問として問いかけてみると、皆さん、現実を忘れて「理想」を語られる。

次に、これが何かわかりますか（文末図）。これは、「子供を指導する際、指針となるものは何ですか」ということを指導者に聞いた結果です。回答が多かったものは「自分のスポーツ経験をもとに」ジュニアスポーツを指導する。ところが、その指導者に、「では、ご自身のジュニアスポーツ時代に組織、何かスポーツの、加入経験はありますか」と問うと、そのような経験を持たない人が実に7割近くにもものぼります。ジュニアスポーツで楽しまなければいけない、いろいろなスポーツをしなければいけない、AチームもBチームであっても、そんなものとは

関係なくみんな多様なスポーツをやらなければいけないと思っている人が、実は、「では、自分はそうしたジュニアスポーツの活動をやったことがありますか」と聞くと、「やったことがない」という人が圧倒的に多いのです。少なくともこのデータはそのようなことを浮き彫りにします。

そうすると、大学発の総合型、僕は、研究機関として取り組むべき対象というものは、もしかして一つとしては、いろいろな活動のやり方がある中で、このようなジュニアスポーツをめぐる理想と現実のギャップに対して、そのギャップを埋めていく作業などが一つ、大学だからこそできる大きなアドバンテージ、研究者がそろっている人材機関であるからこそできる一つのアドバンテージなのではなどと考えております。勝手な僕の想像ですけども。

今日のお話は、もし興味を持たれましたら、本が出ています。図書館にも入っていますので、ぜひご覧ください。本当はもう1つ話したいことがあったのですが、時間なので、僕の方は、このような形で終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

〈資料①〉

S氏：あの人（T会長）は東京都議会自民党幹事長までやった人だから政治手腕があったので、私たちはあと役員をやったときにいろいろ前会長のやり方について批判もあったのですが、それに対して今度はどういふふうにしようかというふうな規約改正とか人事の面などを参考にしますと、やはり鋭いというか切れ味のいい素晴らしい会長だったなと私は個人的に思います。ただ、個人的にちょっと個性が強かったので、それに合う人と合わない人がはっきり区分けになったんじゃないかということですよ。ともかく体育協会を一所懸命発展させようというような努力をしていたことは、私は認めたいと思いますね。

K氏：T（会長）さんの場合は、～中略～非常に切れる方でね。先も見えるし気性も激しいかもしれませんけれども、確かに「見通し」ということにおいてはいままでの会長にはない鋭いところがあった。

〈資料②〉

思い出の人々

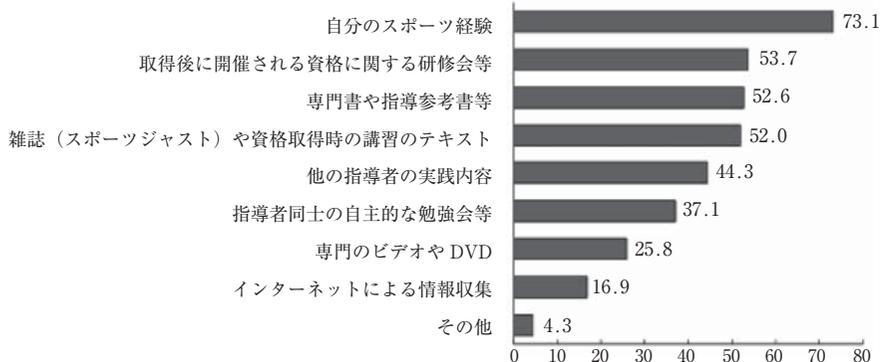
軟式野球の普及と発展に努力を重ねた多くの先輩がいます。連盟の基礎を作られた初代野村幸次郎会長には敬意を表する次第であります。特に二代目遠藤静舗会長の働きには思い出深いものがあります。名物審判の名高かった粕谷藤治、今福桃太郎、松本武雄の各氏が筆頭に大高末之助、野和田正一、現会長設楽秀雄の各氏を要職に配して昭和32年から19年間会長として常に和をモットーに今日に連盟の実質的基盤を整備確立されたのみならず、この間昭和46年から八王子体育協会会長並びに東京都軟式野球連盟副会長を兼務し病を得て亡くなる昭和51年まで勤められ、野球のみならずスポーツ全般に渡りその振興に尽くされた功績は後世に語りつがれ我が野球連の誇りと云っても過言ではありません、又連盟発足当時から遠藤さんと一緒に陰に陽に協力おしまず野球一筋であった四代目松本武男会長も忘れ得ぬ一人で、野球をこよなく愛し自宅にまで多くの後輩を呼び育てられ、会長として創立40周年を祝ったのを最後に通算50年に及び

野球人生を閉じられましたが私達の脳裏にはあの眼鏡越しに連盟や審判の道を説いた姿が今も浮かびます。そして松本さんの一番弟子とも云える末岡昭氏の事も語り残したい一人です。当連盟にソフトボール部が設けられた昭和24年から親身になって基礎作りから手掛け38年に分離独立を行ないソフトボール連盟の総務・理事長・副会長を歴任、又体協のソフト評議員、理事としての活躍更に当連盟の総務、副理事長、副会長も歴任したのみか東京都の野球連盟評議員を10年、ソフトボール連盟の理事を8年間も一人三役ならず一時は五役を頑固一徹完全に成し遂げ亡くなる平成6年10月（行年66才）まで38年間の永きに亘り尽力され今日の両連盟の発展に寄与された功績は特筆されるものであり、我が連盟として誠に代え難いおいしい人物を失い氏を襲った病魔はあの五役の激務故ではなかったかと思うと残念でなりません。ここに50年の節を迎え前述の3氏をはじめ多くの話題と貴重な足跡を残され心成らず亡くなられた諸先輩の遺訓を偲び心よりご冥福をお祈り致します。

〈資料③〉

当時高井戸にあった岡田守弘先生の道場では警視庁最高師範の道場と云うことで、GHQから稽古が許されていると云う情報と、フィリピンでマッカーサー元帥をゲリラから救ったお礼にと、目黒区衾町の安倍正人さんには、その神社の境内での剣道大会を行うことが許されていた、と云う情報も得た。当時剣道の出来たのは、この2ヵ所だけであったとのことであった。このため岡田道場には剣道名誉の先生方、高野茂義、持田盛二、笹森順造、小野十生などの大先生方が集り稽古に励んでいたとのことであった。以上のような情報は得られたものの、未だ禁止令は解除されておらず、正式に稽古が出来る状況ではなかった。昭和26年3月戦災で焼野原の、未だ復興されていない、市内のスポーツ店の蔵の二階に数名の剣道愛好者が集まり、わずかな情報をたよりに、桑都剣道連盟を結成した。会長に天然理心流の田中利一、副会長小坂茂三、師範市川将星、総務柴田正次、内田雅男、秋山幸穂、顧問に武内宗十、安田文三郎、橋本一馬、平林長四郎、藤本栄一、竹松健など20数名の陣容によって活動を開始した。稽古は八王子警察署の道場を借りて行うこととなった。岡田道場等の情報は得ながらも、未だ剣道に対する制限措置は解除された訳ではなく、何時GHQからの呼び出しを受けるかも知れないという状況で、若し呼び出しがあった時は誰が出頭するかと覚悟を決め、悲壮な思いで稽古をしていたものであった。

笹川スポーツ財団 2011年度調査報告書「子どもの運動・スポーツ指導者の意識等に関する調査」



資料参考文献：

東京都八王子市体育協会（1996）『八王子市体育協会50年史』

笹川スポーツ財団（2012）「子どもの運動・スポーツ指導者の意識等に関する調査」

質疑応答

森 文学部の体育の教員をしています森です。本日はありがとうございました。シンプルな質問で、法政クラブを始められて何が一番よかったのかなという、現在のところの苅部先生の見解で結構ですが、始めてよかったなということを少し紹介していただければと、よろしく願います。

苅部 ありがとうございます。悪かったこともたくさんあるのですが、よかったことは、まず、大学の応援者が確実にふえてきてくれたということはやはりあります。今年法政大学は箱根駅伝に出られませんでしたけれども、箱根まで足を運んでくださる方も非常にふえましたし、スポーツを応援して下さって、法政大学を地域が認めてくれて、垂れ幕も今まで出ていなかったのですけれども、出してくださったり、地域が少しずつ大学を認知してくださっているということがあります。それから、クラブで、小学校から入ってきた子供たちが、法政大学を選んでくれる学生が実はいて、来年あたりには大学に入ってくるかなという感じです。法政の附属校に、今、何人か入っていますし、法政でクラブをやって、そのあと大学に入ってきてくれて、何か新しい形ができてきたということは非常に意味のある、また、うれしいことだと思います。

ホリイ お話、ありがとうございました。総合政策学部2年のホリイです。先生のやっぴらっしゃる、そもそものこの法政クラブの目的が地域貢献ということだったのですけれども、実態として、定性的にいいので、地域に今貢献できている場面があるのかどうかということを、先生の視点で教えてください。

苅部 そうですね、実際は、本当に近隣の人たちが来ていないのが現状で、もう少し、本当は、地域の高齢者の方たちがかかなり多いので来ていただきたい。今、医療費がかかなりかさんでいまして、八王子市もかなりの金額になっていて、それを少し減らしていきたいということで、高齢者の方たちに運動させることで、そのような医療費を削減していきたいという政策が実はあって、それも相談を受けているのですが、そのようなこともわれわれはやっていかなければいけないと思っているのです。そのようなことに関しては、実際はできていないというところがあります。ですから、地域に本当に貢献できているかという、実際はまだまだできてないというところが現状かもしれません。ただ、地域が昔よりも、大学に対する考え方は徐々に変わってきてくれて、大学の中で、近くの方を見ることが多くなりました。今までは大学を散歩さ

れたりするような方はほとんど見なかったのですけれども、幼稚園の子供たちが大学の中で遊んでいたり、もちろん連れてくるのですけれども、そのような形で、使ってくれるようになったということはあると思います。ですから、それだけを含めても、ある程度、大学を地域の方が少し認知して、使ってくださるようになったかなということはあると思います。お互いにメリットがあることを考えています。でも、まだまだだと思います。大学に対するプラスの方が大きいかもしれません。

演者プロフィール：

荻部 俊二氏

法政大学スポーツ健康学部教授

1969年、横浜生まれ。法政大学経済学部、そして筑波大学大学院体育研究科、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科を経て現職。専門は体育学、コーチング学、スポーツ心理学。

現在は法政大学の教員をなされている傍ら、早稲田大学の招聘研究員、法政大学陸上競技部監督、そして、総合型地域スポーツクラブ、NPO 法人法政クラブの事務局長。

1996年アトランタ、2000年シドニーオリンピック出場。専門種目、陸上競技、短距離。

小林 勉

中央大学総合政策学部教授